

1、皆様、はじめまして。

私は、滋賀県米原市で「社会福祉法人ひだまり」の理事長をしています永田と言います。

この度は、名誉ある糸賀一雄記念未来賞を受賞致しました事、大変嬉しく思いますと共に、この 16 年間の活動を支えてくださった皆様に心より感謝の気持ちでいっぱいです。

多くのご縁と支えがあってこそ今の自分があるのだと、改めて実感しております。

2、それでは最初に、私の自己紹介をさせていただきたいと思います。

私は、看護師とケアマネージャーをしています。若い頃は市立長浜病院で脳外科や透析室勤務、そして長浜市の訪問看護をしておりましたが、29歳の時からこの活動を開始し今に至っています。

私には、現在、23歳、高校3年生、中学1年生となる3人の子がいて、女性が家庭を持ちながら仕事をするの大変さも痛感してきた16年間でもありました。その経験をもとに、女性がライフスタイルに合わせながら仕事を続けていけるような仕組みを模索し工夫してきたこともあり、今では多くの働くママさんたちがひだまりで活躍してくださっております。

また、自分自身のライフワークとして、地域の方々に認知症や地域福祉の理解をしていただけるよう出前講座に回らせて頂くなどの活動をさせてもらっている日々です。

地域に出向くと、いろいろな声を伺います。その声を大切に共に課題の解決を考える事が、今の私に課せられた大きな使命でもあると思う日々です。

3、さて私の活動のお話に入る前に、まずはこの写真の伯母をご紹介しますください。

この伯母がいなかったら、今の自分はいなかったと思うほど、私にとっては大きな存在です。

思い起こせば、平成13年、ちょうど次女を出産した頃、ある日突然、伯母が私に言いました。

4、「子供からお年寄りまで、世代を超えて誰でもいつでもふらっと立ち寄れる居場所を作りたい」

最初私は、伯母が何を言っているのかがわかりませんでした。

今考えると、きっと伯母は、多世代がお互い様に支えあえる地域の居場所が作りたかったのだと思います。

その日から、二人三脚で居場所作りの夢を叶える模索の日々が始まりました。そうして1年半が過ぎた平成15年3月にNPO法人を立ち上げ、活動拠点となる空き家も見つかり、ようやく夢に向けた一歩が踏み出せるまでに至りました。

ところが、空き家の改修を始めた数日後、伯母が脳出血で倒れ、私は大きな岐路に立たされました。

たった一人で、この夢に向かって進むのか、それとも止めるのか・・・

当時、地域福祉について右も左もわからなかった私にとって、何かを立ち上げるなんて不安で仕方なく、全てを白紙にする事も含め、苦悶の日々を過ごした記憶が蘇ります。

しかし、結果として私は、伯母が人生をかけた夢を壊すことは出来ないという思いで、一人で事業を立ち上げる事を決めました。

よく、「どうして若くして地域福祉事業を立ち上げられたのですか・・・」と、ご質問をうける事があります。

だけど私には、けして、地域福祉を担って頑張っていきたいという壮大な目標があったわけではなく、ただ、一人の女性が掲げた夢に共感し、私に出来る事を伯母に代わって実践していこうと思っただけなんです。

だから、皆様にもぜひお伝えしたいのです。

何かの活動のきっかけは、きっといろんなところに転がっていて、それがご縁で、生き方や繋がりも変わるという事を。

その積み重ねが、時に新しい支援の在り方や未来を作るのではないかと実感しています。

ぜひ、今日ここにいらっしゃる皆様も、ひとつひとつのご縁や繋がりを大切に生きてほしいと願っています。

5、こうしてNPO法人ひだまりは、平成15年6月に宅児・宅老デイサービスとして、高齢者の昼間の預かりから活動を開始し、翌年から障がい児保育や認知症の方の一時お泊り支援をスタートしました。

その後、高齢者の「通い」「泊り」「訪問」を一体的に支援できる「小規模多機能型居宅介護」認知症の方の住まいとなる「認知症グループホーム」を開設しました。

また、障がい児さんが18歳を超えても地域で継続した支援できるようにと、各高齢者支援事業所において基準該当生活介護をそなえたり、他の障がい支援

事業所にて認知症になられた知的障がいの方の支援に困っているという相談をきっかけに、その方々もうちの高齢者支援事業所で積極的に受け入れができるようにとしてきた結果、現在では、高齢者支援事業所と障がい支援事業所とが連携しながら一人の方を支える仕組みに発展しました。

「高齢者介護事業所で知的障がいの認知症の方を受け入れる」

それは、言葉でいうほどすんなりとできた訳ではありませんでしたが、「誰でもいつでも前向きに受け入れよう」という職員風土は、どんな大変な事でもチームで話し合い、受け入れるための工夫を模索してくれました。また、「よりしっかりとサポートできるように、これからは障がい支援の勉強会もしていこう」と、職員さんたちから発案してくださった時は、涙がでるほど嬉しかったです。

以降、職員さんたちは、毎年この勉強会を継続してくれています。

今日、ひだまりで共生型支援が普通に実践できるのも、このような職員さんたちのお陰であり、人財に恵まれた環境で活動できること、私は本当に幸運なのだと思います。

近年、地域包括ケアの大きな柱として「地域共生社会の実現」が掲げられた事で、「高齢者と子供」や「高齢者と障がい者」を結び付ければ良いのかと簡単に考えておられる介護事業者が出てきたように感じますが、私はちょっと違うと思っています。

何かと何かを結びつけて支援するのが「地域共生社会」ではなく、「地域にあるいろいろな困りごとを皆で考え、支え合い、私たち事業者は必要に応じてそれを「まるごと」で支援する・・・

無理にくっつけるのではなく、自然と支援へと結びついていく、

そしてそれは、活動する地域によって形も違って当たり前なのだ・・・

そのような包括的な支援を、これからも継続していきたいと思っています。

しかしながら、このように支援の幅を広げてきた一方で、社会的には高齢化が加速し、地元での高齢者施設だけでは受け入れができず、関わる何人もの高齢者の方が遠くの施設に入っていられる姿をみてきたのも事実でした。

多くの方は、介護が必要になっても住み慣れた地域で暮らしたいと願っています。

だけどその願いが叶わず、遠くの施設に入って人生の余生を迎える人も決して少なくはありません。

遠くの施設に入ったら、だんだん家族の足も遠のき、繋がりも薄くなり、そん

な孤独と隣り合わせの余生・・・

長年頑張ってきた人生の先輩方の最期が、こんな寂しいものでいいのだろうか、

もし、自分だったら、住み慣れた地域で余生を送りたいし、もし施設に入り介護を受けるとしても、家族との繋がりや自分自身を大切に余生を送りたいと思うはず。

じゃあ、その為に私に何ができるのか・・・

そんな自問自答を何年も繰り返し、勇気を振り絞って決めたのが、普段の暮らしの中にある当たり前の生活を大切に、をコンセプトにした「小さい規模の地域密着型特別養護老人ホーム」の開設でした。

そこで、平成 27 年に社会福祉法人ひだまりを設立し、昨年春から、地域密着型特別養護老人ホーム「わが家ひだまり」がスタートしています。

合わせて、訪問看護ステーションも開始し、地域を駆け回るコミュニティナーズの充実に向けて歩んでいるところです。

6、こちらが、ひだまりの現在の様子です。一つの拠点の中で、いろいろな機能を持つことで多様な支援が出来る工夫をしています。そしてそこには、職員と利用者さんだけでなく、いろんな人たちが行き来しています。この居場所を、けしてコロニーにはしたくないと思ってきました。

7、こちらの在宅支援拠点にて実施している障がい支援では、湖北圏域に住む障がい児者を、年齢や障がいの種別に関係なくお預かりしており、主に学校帰りや週末及び長期休みの際の預かりを主とした支援をしています。

また、親御さんが急に体調不良になられた時や不意の困り事が発生した際に、親に代わって重症心身障がい児童さんを学校まで送っていたり、土日に限らず急な預かりを引き受けたりと、生活に密着した支援を心掛けています。

8、また、こちらが昨年スタートした地域密着型特別養護老人ホームがある拠点です。

この特別養護老人ホームは、わが家のような居場所で人生の最期を過ごしてほしいとの思いで、「わが家ひだまり」と名付けました。

9、面会時間の制限がないので、仕事帰りでもお母さんに会いに来る事ができ

たり、誕生日やお盆にご自宅に連れて帰りたいと希望されれば入居者さんをご自宅までお連れする支援をしたり、最期まで家族の縁を大切にしたい支援に取り組んでいます。

また、人の命も動物の命もその重さは同じだとの思いと、その人が暮らしの中で大切にしているものは介護が必要になってもなお大切なものには変わらないという思いから、自宅で飼っていたペットを処分して入るのではなく、一緒に連れてきていいよと言える施設にしています。

そして、働くママさんたちへの支援として、保育士が常駐する事で、子供連れでの社会参加をすすめています。

私はいつも、「人の暮らし」を大切にしたいと思ってきました。

だけど、高齢者・障がい者、いずれの介護現場においても、まだまだ「人の暮らしを支える」という視点での支援が十分ではない事も少なくないのが現状です。

人は、心と身体が揃って初めて人として生きていけるのです。

だからこそ、その視点を、これからもずっと大切にしていきたいですし、皆様にも大切にしていっていただきたいと願っています。

10、さてここから、この16年間の活動を具体的にご紹介させていただきます。

平成15年、スタートした場所は、一軒の空き家でした。

11、周りへの呼びかけで、看護師さん、保育士さん、ヘルパーさん、資格のない人、何人かが集まってくれ、その人たちの子供もごちゃまぜでのスタートでした。

12、身の丈に依じて、出来る事から・・・

まずは、高齢者の平日昼間預かりと、健常児さんの預かりからスタートしました。

13、そこにやってきてくれたのは二人の認知症のおばあさん。

第一号利用者のヤスエさんとみゆきさんでした。

14、医療の現場しか知らなかった私は、このお二人の支援に関わって初めて、介護現場における認知症の方へのケアの不十分さと、在宅における認知症の方

の数々の生きづらさを目の当たりにし、大きな衝撃を受けました。

15、たとえ認知症になっても、出来る事はたくさんあり、人としての感情も生きている。

幼い子供を大切に思う気持ちも生きている。

だけど、介護現場では、時に幼稚に扱われたり、社会でも厄介者にされてしまったり、なんて生きづらい病気なんだと・・・

16、だからこそ私は、この人たちと「共に生きる」を大切にして関わろうと決めました。

それは、小さな一軒家での小さな支援ではありましたが、少しずつ関わる人が加わり温かい居場所になっていくのを感じる一年でした。

17、そんなある日、一組の親子がひだまりにやってきました。

「たきもとこうちゃん」

医療的ケアが必要な2歳のこうちゃんとそのお母さんでした。

この親子との出会いがなかったら、今の支援はなかったのではないかと思いますし、この子が、私の支援に対する考え方の根幹を作ってくれたのだと思います。

こうちゃんは、鼻からチューブが入っていて、常時、吸引器で痰を取る事が必要なお子さんでした。お母さんはこうちゃんを生んで以降、ずっと育休をとってきましたが、2歳になり、ようやくこうちゃんの状態も落ち着いたので、仕事に復帰したいと考えておられました。

しかしながら、当時、地域の保育園では看護師配置がなく受け入れを断られ、困り果てて相談にいらっしやっただのが経緯でした。

初めて二人にあった時の事は今でも鮮明に覚えています。

お母さんがこうちゃんを畳におろした瞬間、こうちゃんはゲボッと吐き戻しし、私は即座に預かる際のリスクが頭をよぎりました。

何かの拍子で吐き戻すことがあり、かつ自分で痰を出すこともできない、窒息の可能性のあるこうちゃん、そんな状態の子を私たちは預かる事ができるのだろうか・・・

だけど、お母さんと1時間ほど話をして、私は率直に思いました。

「どうして健常児さんを生んだ私は仕事が継続出来て、どうして障がい児さんを生んだお母さんは仕事ひとつ復帰するにも大きな壁が立ちはだかるのだろう

か」

同じ女性として、同じ子を持つ親として、何もせずにお母さんを見捨てる事は、私には出来ない、と。

18、そして、私が決めたことは二つ。

・同じ子を持つ親として、こうちゃんとお母さんの伴走者になろう、とにかく、一度預かってみよう。

医療ケアの必要な子供にとって、お家での医師はお母さん。難しいことがあればお母さんと一緒に考え乗り越えていこう。

不安がっていた保育士さんにも「一緒に見るから、とにかくやってみよう」と説明し、こうして、こうちゃんの受け入れが始まりました。

そして、こうちゃんとの出会いで、もう一つ決めたこと。

・この先、いろんな方が助けを求めてやってくるかもしれない。だけど私は、その方々に対して最初から何もせず「できない」という言葉はけして言わないでおこう。

出来る出来ないの前に、必ず一緒に考えよう。私たちの支援に限界があるならば新しい支援の在り方を一緒に考え、行政にも相談しよう。

そう、ひだまりに訪れるあらゆる人たちの人生において、共に生きる伴走者であり続けよう・・・と。

19、私がこの16年間、大切にしてきた事はこれだけです。

「年をとっても認知症になっても障がいを持って生まれても、地域で住み続けるために、私にできる事は何だろう？」

この言葉に全てが詰まっていて、それだけを考えながら歩いてきました。

20、例えば、高齢者支援では、働く介護者さんの声に応えて「早朝や延長預かりの対応」を実施しました。保育園では、早朝や延長保育があるのに、どうして高齢者介護ではないのだろうと想ったの取り組みです。

また、365日利用が出来る仕組み。年末年始でも必要な時には預かりますよ、と言ってきました。

そして、冠婚葬祭など、何かあった際の急な預かりの仕組み。人の暮らしに平坦なんてなく、何かの際に助けてもらえる安心感は、在宅介護において大切な事だと思っています。

障がい児者支援では、自閉症、知的障がい、重症心身障がい児、どの子ども受け入れると共に、その成長に応じた支援に心がけ、増え行く一人親への支援にも取り組んで来ました。

それは、「制度ありきではなく、暮らしありき」という視点。ニーズがあれば、必要であればまずは動く、そして制度は後からついてくる、いえ、制度になるよう働きかける、といったような感じでしょうか・・・

21、そうして見えてきた大切な事、
人は、24時間365日の安心と安全があって初めて暮らしていけるという事、
そして、関わる私たちは「心」と「身体」を両方から支援する視点を心がけていくという事、
さらに、増えゆく複合相談を総合的に受けていく必要性。
そうして、全ての人に尊厳ある人生を全うしてほしいと思っています。

22、その為にも、人・地域資源・福祉サービス・そして行政が、顔の見える関係として繋がる事で、地域ぐるみで支えていく仕組みが出来るのではないかと考えました。

23、そこで私が、まず取り組んだのは、介護福祉の現場から発信する地域作りでした。
何故か・・・
地域には多くの産業があるのですが、その中で介護や福祉産業は、実のところ10%にも満たないそうです。
その10%もないような産業が「地域福祉」とか「地域ぐるみで支えよう」と言ったところで、皆さんにとっては、やっぱり他人事であり、また何か関わってみようと思ったとしても、何から手助けしてよいかもわからないのではないかと考えたからです。
だったら、介護福祉の現場から発信する地域作りがあってもいいのじゃないかな・・・と。

地域のサロンや集まりに出向き、普段から地域の人たちとの顔なじみの関係になる事

24、認知症や障がいの理解を進める働きかけのため、地域に出向いての出前講座

25、そして地域の方々の身近な不安や困り事の相談先としての「ちょっと相談」

26、また、地域での支援者が、少しでも障がいに関する知識を持っていただけるように始めた「障がい支援に関する研修会」

私達に出来る事は小さな事ばかりですが、それでも無駄な事ではなく、この小さな積み重ねが、地域ぐるみでの支え合いの仕組み作りに役立ていければと思いながら継続しています。

27、そして、介護の現場から見えた課題に対し、公的支援では届かない隙間を埋める支援も必要だと考えてきました。

例えば、養護学校に通う医療ケアの必要な子を持つ親御さんから聞いた、「親が急な病気や用事で学校まで送る事ができない場合、子供も学校を休ませなくてはならず困っている」という声に応え、有償運送を活用して急な学校送迎に対応するようになりました。

重症心身障がい児さんが大きくなるにつれ、自宅でのお風呂介助が難しいとの声を受け、学校帰りの預かりの際に、ひだまりでお風呂支援もする事で、親の負担軽減のお手伝いをしたり、柔軟な発想で、ひとつひとつの困りごとに向き合ってきたように思います。

28、そしてその中心にあるのは「共に生きる」という考え方。

その考えを、本人家族・地域の人たち・行政・そして私たち事業者が、手を取り合っていくことが大切じゃないかと思っています。

29、そしてその支援は、

高齢者・障がい者・子供、どの分野も、必要に応じて一体的にサポートできることが望ましいと考えます。

年々深刻化する少子高齢化社会、複合課題を持つ家庭の増加・・・

それを考えれば考えるほど、今まで主流だった縦割り支援だけでは限界があるのではないのでしょうか・・・

30、そして私は、これからも「世代を超えて共に生きる」を大切に、一つ一つの命と、誠実に向き合っていきたいと思っています。

31、女性の出産年齢が上がり、高度医療が進み、社会的にも地域との関係が希薄化してきた現在において、障がいを持って生まれてくる子供の数は、この

先もきっと減る事はないのだろうと推測しています。

だけど、たとえ障がいを持って生まれたとしても、その子の成長に沿った関わりをしていけるような支援を、ずっと探り続けていきたい。

32、家と学校の往復で終わるのではなく、支援先との関わりだけに留まるのではなく、一歩外に出かける事を大切に、そして一歩外に出た時には周囲が温かく見守ってくれる地域であってほしい。

33、健常児さんも障がい児さんも、慰問や交流ではなく、普通に一緒に過ごす当たり前の関係。

それを目指せば目指すほど、糸賀一雄先生の有名な言葉である「この子らを世の光に」の意味の奥深さを痛感してやみません。

34、おじいさん・おばあさんから無条件の愛情を受け、みんなに可愛いがられ成長を喜んでもらえる幸せ。

35、多世代の中でその子らしく心豊かに成長していく姿。

36、そんな日々を繰り返しながらの16年。

気づけば、小学生だった子も成人し、中には30歳を超えた子も出てきました。子供の頃からずっと見てきた私たちにとっては、親と同じような気持ちで、いつまでも子供だと思っていたらいつの間にか大きくなっていったんだね・・・といった感覚です。

37、当時広かったお部屋も、一人一人のバギーが大きくなって、いつしかぎゅうぎゅうになりました。

そして、子供たちが成長すると同時に、両親も年を重ねていき、悲しい事に、お母さんを病気で亡くした子も出てきました。

障がい児者の生活場所の統計を調べると、18歳まではほとんどが在宅で生活しているものの、18歳以上になると在宅と施設がほぼ同数になっています。

そしてひだまりでも、ここ数年間は、子供の頃から共に成長を見守ってきた子を、遠くの施設に送り出す別れを経験するようになりました。

介護する側の親の年齢的な限界を考えると、どうしても施設入所という選択肢

は避けて通れない事かもしれません。

だけど、親亡きあとの我が子の行き先、そして、その子の幸せを考えた時、同じ親として、ご両親がどんな思いで我が子を遠くの施設に送り出すのかと考える度に、胸が締め付けられる思いでなりませんでした。

38、大きく立ちはだかる

「医療ケアが必要な障がい児者の地域での暮らしの継続の難しさ」
何とか、成長と共に寄り添える支援の仕組みが出来ないものか・・・

39、医療ケアの必要な児童の受け入れを継続し

その子たちを育てる親御さんへの支援を充実したい
そして、医療ケアが必要であっても、ずっと地域で暮らせるようにしたい

何より、障がいを持った子を持つ親の当たり前の思いを大切にしたい。

じゃあ、その為に、私たちに何が出来るのだろうか・・・

いや、どう頑張っても、何もできないのかもしれない・・・

そんな思いをいったり来たり、悶々と過ごした数年間でしたが、それでも
「成長と共に寄り添える支援の仕組みを作りたい」という気持ちに変わりはありませんでした。

だったら頑張るしかない、

この16年間、今までだって、制度だけでなくニーズありきの視点で考えてきたのなら、あらゆる角度から支援の方法を考えてみよう。

大きな課題は「医療ケア」への対応。

その課題を共に解決するために、看護師さんたちの力を借りられないか。

そして、その力が集まれば、自ずと地域看護力となり、コミュニティナースの仕組みにも広がる地域にもなるのではないか・・・

40、そうして考えついた支援が、「看護師が活躍する共生型サービス」という体制です。

この拠点では、障がい児者における多機能支援として、医療ケア対応型の日中活動支援やレスパイト支援を。そして、高齢者における支援として看護師が中心となってサポートする小規模多機能支援を合わせた、新しい形の仕組みです。

そこに付随し、高齢者・障がい者に問わず相談ができるワンストップ型の相談支援体制や訪問看護等、いろいろな支援の仕組みが重なり合った拠点を目指すことで、本当の意味での地域共生ケアに広がっていくのではないかと考えています。

41、また、高齢者支援と障がい児者支援が同じ拠点で実践できる事の延長線上として、親が高齢となっても、障がいを持つ我が子の姿を見続けていくことができるのではないかと考えています。

この居場所が、単なる支援の場所ではなく、家族や地域の縁を大切にしたい温かい居場所となっていければ・・・と。

そして、様々な関係先と普段から顔の見える連携をすることで、それぞれの機関において、障がいの程度や状況にそったサポートをしていけるよう支援の幅が広がるのではないかと考えています。

今お話ししたこの考えは、いろいろな制度を活用する形で、ようやくたどり着いた構想ですが、正直なところ、これはまだまだ、あくまでも構想でしかありません。

それでも、声に出さなければ何も始まらないと思います。

そして、夢は諦めなければ必ず叶うとも思っています。

だから私は、時間がかかったとしても、「使命感」と「責任感」を持って、これからも自分なりの考えを、しっかりと伝えていきたいと思っています。

42、できればずっと在宅で・・・

それが無理でも、遠くの施設ではなく地域の中にある「住みかえ」という居場所です。

それは障がいの有無に関係なく、一人の児童が成長し大人になって歩いていく人生に、家族、地域、行政、そして私たち事業者が協力しあい、一人の人生を隙間なくずっと支えていけるような支援。

そういう、成長に寄り添った支援ができる未来が来ることを願っています。

43、年をとっても認知症になっても、障がいを持って生まれたとしても、地域で住み続けるために・・・

私はこれからも、両親から教えられた「人に優しく、自分に厳しく」そして「継続は力なり」の気持ちを大切に、この賞の名のごとく未来に向かって、私なりにできる活動をしていきたいと思っています。

44、皆さまもぜひ、自分なりにできる事をほんの少しでも誰かのために役立
ていただきますよう、そして温かい未来を共に作っていきましょう、心より
願っております。

最後になりましたが、関係する皆様、そして何より、ひだまりの活動を一生懸
命支えてくれている職員の皆様に、改めて心より感謝申し上げ、私からのお話
しを終わらせていただきたいと思います。

本日は、誠にありがとうございました。